

バングラデシュを訪れて

途上国の現実とは

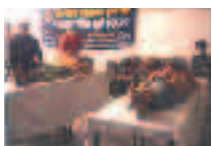


山本 真太郎

総合科学部人間社会学科 国際政治学4年
現在イギリス留学中です。
8月にはアフガニスタンに行ってきました。

「もうやめてーっ」という患者の悲鳴の中で、一緒にいたドイツ人のリサは気分を悪くして外へ出てしまった。残った私たちは、泣き叫ぶ患者の腕や足を一生懸命押さえていた。電気の供給が少ないせいか電灯は非常に暗い。医師は淡々と白内障患者特有の白く濁った水晶体を取り除こうと、そして私たちは、数少ない懐中電灯を片手に患者の目を照らしながら、5・6時間格闘した。2日後、手術を終えて家に帰る患者の顔には、大きな笑みがこぼれていた。

ここはバングラデシュ。インドの東隣りにあり、最貧国



(LDC:Least Developed Country)の中に数えられる発展途上国である。私は今年3月から1ヶ月間、国際ボランティアに参加するために訪れた。私が参加したBWCA (Bangladesh Work-Camp Association) というNGOは、医療の行き届かない地方の村々の白内障患者を対象に手術を提供しており、バングラデシュでも歴史が古いNGOの1つである。もちろん私は国際政治学の専攻だから医学の知識などまったくない。他の参加者には看護師経験者や看護学校の生徒もいたが、内容は手術補佐だから、誰にでもできるような仕事だ。それでも発展途上国の医療環境の悪さを知るには十分だった。

キャンプ中に集まった手術希望の患者の数は約1000人。長蛇の列が並んだ。しかし結果として手術を施すことができたのは60人ほど。残りはもちろんその必要がないという理由で手術を受けなかったわけではない。NGO側がすべてを負担しなければならないという現状では、医師を2人雇うだけで精一杯なので、とても全員にまで手が回らなかったのである。手術を受けられない人々の中には薬を渡されて帰った人もいるが、それも気休め程度の量でしかない。人数が多いからと急に投与の数を半分にしたこともあった。手術室は前日に僕らが学校の教室を作り変えただけのもので、手術用のベッドも教卓を2つ並べただけのもの。手術に使う器具も消毒などしない。ただ沸騰した湯につけるだけ。電灯でさえもいつ消えてもおかしくない状況だった。

途上国に共通して言えること、それは都市部と地方とのギャップである。アジアの中には観光産業の発展によって人気の高い国もあるが、一旦都市から離れるとそこには食べるものにも、基本的な医療にも事欠く現実がある。今回の体験では机上ではなく、実際にその現実と向き合うことができた。現代はグローバリゼーションという言葉が盛んに用いられるが、私たちの生活が途上国の人々のそのような生活の上に成り立っていることを忘れるべきではない。だからといって「私たちの生活を改めよう」などと大きなことはとても言えないが、少なくとも私たちがそうした“豊かさ”の中にいることは知っていてほしいと思う。